

企画名：沖縄母性看護研究会 第1回 海軍病院の助産師外来
実施日：5月16日
企画実施組織：小西清美、島田友子、金城壽子、鶴巻陽子、長嶺絵里子
<p>企画の目的・概要</p> <p>米国における助産師の役割を知り、グローバルな視点で助産について考える機会とすることを目的とした。アメリカの場合は資格習得のために修士課程の教育が必要であり、習得後も免許の更新のために、日々の自己研鑽が必要となる。助産の専門性が高く、助産師の担う役割も責任も大きい。実際に出産後の創部の縫合や吸引分娩、子宮頸癌検診、避妊具の挿入、場合によっては医師の指示なしに助産師の判断のもとに内服薬の処方をするなど詳細な助産師の活動を知ることができる内容であった。ビデオでは初産婦の陣痛開始から出産に至る分娩経過の夫の関わり方、助産師の関わり方、産婦の陣痛の対処方法を知ることができた。海軍病院に勤務する助産師2名に対して通訳を介して実際の助産師の役割や助産業務の内容を具体的に知ることができた。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>・参加人数は13名。 内訳は助産師、看護学校教員、産科看護師、理学療法士 看護教員他</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>日本とアメリカの助産ケアの違いについて質疑応答がおこなわれた。アメリカの助産師が行う業務の中には日本では医師のみが行える行為もあり、アメリカと日本の違いを知ることにより専門性の追求や、助産師としての責任について振り返ることができたのではないかと考える。アメリカの助産師の取り組みを知ることによって日本の助産について考える機会になったと考える。</p>
<p>今後の取組み</p> <p>母性看護の認定看護師が存在する中、助産師の役割や質の高さが今後求められてくることから、今回の企画を通して助産について考えるきっかけになったのではないかと考える。参加者から両国間の違いを理解できる講座をしてほしいとの意見もあり、今後も当大学を拠点にして継続することで、情報発信の場づくりを提供することができると思われる。</p>



企画名：沖繩母性看護研究会 第2回 妊産婦の腰痛
実施日： 7月18日
講師：神田佳代(医療法人光風会 介護老人保健施設和光園・理学療法士)
企画実施組織：小西清美、島田友子、金城壽子、鶴巻陽子、長嶺絵里子
<p>企画の目的・概要</p> <p>妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、ケアにかかわるコメディカルの知識の洞察や意識づけを促すことで助産ケアの質の向上に貢献するために妊婦の腰痛を理学療法士からの専門的な知識から学ぶことを目的とする。</p> <p>概要</p> <p>パワーポイントと配布資料を基に行われた。妊産婦の身体変化の評価の仕方や妊娠各期における腰痛の対処方法、理想の姿勢と腰痛を引き起こす姿勢の比較を行い関節や筋肉の状態をイメージしながら姿勢について学び、妊産婦の腰痛について、発症率、腰痛部位、疼痛の程度、発症時期の報告と妊婦に実践し効果のあった運動を理解することで、腰痛予防方法を考えていく内容であった。正しい姿勢を専門職者自身が体感することで、今後の指導に役立てていく内容であった。</p>
<p>企画実施報告</p> <ul style="list-style-type: none"> 参加人数は 22 名。 <p>内訳は助産師、産科看護師、保健師、他</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>マイナートラブルの一つでもある腰痛は、妊産褥婦からの悩みとしても多く聞かれ、指導する機会も多い。今回は理学療法士の視点から見た姿勢の評価と具体的なストレッチの方法について説明がされ、参加者からは「トコちゃんベルトをしての運動について」「股関節の痛みが強い場合の対処方法について」「内転筋を鍛えるためには」などより具体的な質問があり、筋肉や関節の動きについて、筋肉の鍛え方についてなど講演者から回答が得られた。アンケートにおける講座の開講日程・時間帯・講座形式は「適切である」が9割を超えていた。アンケートの自由記載においては「ストレッチ体操は母親学級でも活用したい」「いろいろ勉強になった」「勉強になりとても楽しかった」などの感想があった。このことから臨床からの立場からは、今までの指導方法にさらに今回学んだことを紹介していくこととより実践的な取り組みをする動機づけになったのではないかと思われる。さらに理学的なアプローチに着目し、具体的な指導方法を示されたことで身体をよく知り、見て、働きかけることの重要性を知り得る機会になったため、保健指導に今後役立てることができれば今回の研究会がケアの質の向上に貢献できると考える。講義終了後も講師へ熱心に質問する姿がみられた。妊産褥婦の腰痛に対する研究的視点で取り組む際のフィールドワークとしての施設との交流の一端を担うことも出来たのではないかと考える。</p>
<p>今後の取り組み</p> <p>今後も当大学を拠点にして継続することで、情報発信の場づくりを提供すると思われる。今後取り上げてほしい内容として、妊産婦の栄養について（分子栄養学的アプローチ）、妊婦の血液データや疾患時の変化（甲状腺・PIH）の要望があった。専門性に特化した内容についての希望があった。今後とも母性看護に関連したテーマで情報を発信できるように企画していく必要性を感じている。</p>

企画名：沖縄母性看護研究会 第3回 産後ケアについて
実施日：10月17日
講師：鬼澤宏美(かりゆし助産院・助産師)
企画実施組織：小西清美・島田友子・金城壽子・鶴巻陽子
<p>企画の目的・概要</p> <p>妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、ケアにかかわるコメディカルの知識の洞察や意識づけを促すことで産後ケアの質の向上に貢献することを目的とする。</p> <p>概要</p> <p>パワーポイントと配布資料を基に行われた。現在少子化対策として、地域における切れ目のない支援の強化として産後のケアが脚光を浴びている。今回は産後ケア事業として行われている都内のケアハウスの実情とケア利用者の声を知る機会となった。さらに、ケアハウス従事者の意見を知る機会となり、今後の北部での産後ケアの需要、講師の北部地域での活動内容、今後の課題について北部地域の活性化、産後ケア実現に向けての取り組みなど、産後ケアに役立つ内容であった。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>・参加人数は9名。 内訳は助産師、産科看護師、助産学校教員、産後ケア事業経営者、同大学学生等</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>産後ケア事業としては、ニーズはあるものの、分娩に関しては個人病院が2施設あるが、県立病院が正常分娩は行っていない状況であり、地域の中核病院が機能を果たしていない状況である。個人病院も今後も分娩を受け入れていくとは限らないため、地域で活動することのできる助産師を育成する必要が早急にあり、名桜大学に2年課程の助産コースが設立される意義は大きいと思われる。修士課程の助産師を育成する期間として個人病院を活用するなど、ますます大学の教員が地域で活動し、北部地域へ貢献する意義が深く、今後は個人病院との関係性づくりや、地域で活躍する助産師の連携のため大学の役割などを行っていく必要があると思われる。</p>



企画名：沖繩母性看護研究会 第4回 新生児・乳児訪問
実施日：12月19日
講師：田中典子(名護市役所・保健師)
企画実施組織：小西清美・島田友子・金城壽子・鶴巻陽子・長嶺絵里子
<p>企画の目的・概要</p> <p>企画の目的としては、妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、情報交換の場とする。さらにケアに関わるコメディカルの知識の洞察、意識づけに関与し、助産ケアに還元すること。</p> <p>概要としては、母子保健担当の市役所の保健師より、保健師の活動内容について（新生児、乳児の家庭訪問、予防接種、健康相談、子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、小児デイケア）さらに家庭訪問の様子についてパワーポイントを使用し説明があった。子育て支援の具体的な取り組みや、乳幼児健診で発達に問題がある乳幼児に対するアプローチの方法やその後のフォローについて母親を支援する取り組みについて具体的に知る機会となった。他県での取り組みとして健康増進課に助産師や作業療法士がいるなど他の地域の現状を知ることができた。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>参加人数 10名 内訳 看護学生 5名 看護教員 6名 理学療法士 1名</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>・具体的な保健師の活動内容をパワーポイントと講義資料などから理解する事が出来た。幼稚園と保育園の内地とのシステムの違いや名護市の活動状況を含めて具体的に説明があり、名護市の育児支援の現状を知ることができた。乳児検診の保健師が見る発達の見方を定型からコミュニケーションの困難な児を課題発見や問診から抽出するなど具体的な活動内容を知ることができた。発達障害のある乳幼児の見方など参考になる内容であった。</p> <p>実習を終了している学生からは、養育医療 について質問があった。安心して子育てができるよう支援している保健師の活動と包括的に母親をみるために、子育てを志す母親の健康に着目する必要があるのではないかと意見もあった。理学療法士からの母親の産後の健康な体づくりは包括的に母親をみるための重要な視点と思われる。現在乳児健診にボランティアで参加しているため、今後とも風通しの良い関係を構築していく必要があると思われる。また、家族計画指導が妊娠期に行われている、説明が難しい分野であるとの現状があるため、乳幼児検診時の母乳外来時に説明をしていく必要性を感じた。</p>
<p>今後の取組み</p> <p>・研究会を通しコメディカルの連携が円滑に出来るようなパイプ役を担っていくためには、他職種の北部地区で活動をしている方との連携をとるためにも、広報を行い、母性看護研究会の参加人数を確保していく必要がある。今回は健康増進課の活動とどのような有資格者との連携（臨床心理士、保育士、小児科医、歯科衛生士、管理栄養士）をとっているのかが理解できたので、助産師ならではの活動として参画できる場を開拓及び提供できるよう今後とも情報収集とネットワークづくりを母性看護研究会で企画していく。</p>



企画名：沖縄母性看護研究会 第5回 母乳相談ボランティア活動の実践報告
実施日：平成27年2月20日
企画実施組織：小西清美・島田友子・金城壽子・鶴巻陽子・長嶺絵里子
<p>企画の目的・概要</p> <p>企画の目的としては、妊産褥婦にかかわる助産師、保健師、看護師や専門職者が母性看護に関連するテーマでディスカッションを行い、情報交換の場とする。さらにケアに関わるコメディカルの知識の洞察、意識づけに関与し、助産ケアに還元すること。</p> <p>概要としては、平成26年度の乳児健診での大学教員による母乳相談ボランティア活動の報告を行った。具体的に母乳相談利用者の人数、相談内容と指導内容（卒乳、断乳、乳房トラブル、母乳不足感）、北部地域の課題について説明を行った。さらに研究的視点でボランティア活動をとらえ、母性衛生学会で発表をおこなった内容の報告をした。</p>
企画実施報告
<p>参加人数 11名</p> <p>内訳 看護学生 1名 看護教員 6名 保健師1名 助産1名</p> <p>経営コンサルタント（看護師・保健師）1名、看護部長（助産師）1名</p>
企画の実施評価
<p>・大学教員による名護市で行われている乳児健診の1年間の活動状況の報告を行った。情報を共有することで北部地区の母乳を推進し、継続するためのケアの必要性、さらに助産師が母乳を継続して支援するために必要なコストパフォーマンスの問題、市役所内での母乳相談窓口の現状について活発な情報交換がなされた。さらに母乳から児のスキンケアの必要性、アレルギーに関する問題、乳児貧血についてと母乳にとどまらず新生児の身体面や産後の母親の栄養などの話題について保健師の立場、助産師の立場で意見交換し、情報を共有する場にできた。</p>
今後の取組み
<p>・研究会を通しコメディカルの連携が円滑に出来るようなパイプ役を担っていくためには、他職種の北部地区で活動をしている方との連携をとるためにも、広報を行い、母性看護研究会の参加人数を確保していく必要がある。今回は健康増進課の活動とどのような有資格者との連携（臨床心理士、保育士、小児科医、歯科衛生士、管理栄養士）をとっているのかが理解できたので、助産師ならではの活動として参画できる場を開拓及び提供できるよう今後とも情報収集とネットワークづくりを母性看護研究会で企画していく。</p>

